様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００８９７

研究課題名（和文）戦争体験者の記録・記憶を通した第二次世界大戦期の日本アフリカ関係史研究

研究課題名（英文）Research on History of Japanese-African Relations during World War II Through An Analysis of War Survivors' Experiences

研究代表者
溝辺　泰雄（MIZOBE, YASUO）

明治大学・国際日本学部・専任教授

研究者番号：８０４０１４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、第二次世界大戦期のインド=ビルマ戦線において、直接交戦をせざるを得ない状況におかれた日本と西アフリカ出身の従軍兵士および日英両軍の将校・兵士・従軍記者による記録・記憶を通して、従来の研究が充分に拾い上げてこなかった、日本とアフリカの「意図せざる戦い」の実態を明らかにすることにあった。3年間の研究期間中、日本各地の図書館・資料館に「郷土資料」として所蔵されている、旧日本軍の従軍兵士および将校らが戦中、戦後に書き遺した日誌や回想録の詳細な調査、および、アフリカおよびイギリスの文書館・資料館等における文献調査を通して、戦地における日本アフリカ関係史の態様の未解明部分を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
第二次世界大戦期のビルマ(現ミャンマー)では、数多くのアフリカ出身者たちがイギリス軍の一員として日本軍との戦闘に動員され、「インパール作戦」の直前に日本軍との交戦を経験するに至った。さらに、一部の部隊は終戦後も日本兵抑留者キャンプの監視業務にも従事させられた。高温多湿で急峻な山岳地帯から湿地帯に至る過酷な環境にイギリス人兵士が苦戦するなか、熱帯地域への対応力を有したアフリカ人兵士の存在は連合軍の作戦実行上極めて重要な存在とされた。こうしたアフリカ人兵士に関する戦争経験者の記録・記憶を収集し、整理・分析をおこなった本研究は、これまで明らかにされてこなかったビルマ戦線の一側面を解明するものである。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this research was to reveal the reality of the 'unintended encounters' between Japan and Africa, a topic not fully explored by previous studies. This was achieved through the records and memories of Japanese and West African soldiers who were forced to engage in direct combat on the Indo-Burma front during the Second World War, as well as the accounts of officers, soldiers, and military reporters from the British and Japanese forces.
　During the three-year research period, I conducted a detailed study of diaries and memoirs written by soldiers and officers of the former Japanese Army during and after the war, which are held as "local materials" in libraries and archives throughout Japan. Additionally, I carried out a bibliographical survey of documents in African and British archives. Through this research, we have clarified some of the previously unexplored aspects of the history of Japan-Africa relations in the war zone.

研究分野：アフリカ近現代史・日本アフリカ関係史

キーワード：アフリカ史　第二次世界大戦　ビルマ戦線　アフリカ兵　日本アフリカ関係史　旧日本軍

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

第二次世界大戦(以下、第二次大戦とする)期のビルマでは、推定で 5 万人に及ぶアフリカ出身者たちがイギリス軍の一員として日本軍との戦闘に動員された。インド=ビルマ戦線に動員されたアフリカ人部隊は、イギリス軍第 14 軍の指揮下において 1944 年 3 月に開始された「インパール作戦」の直前にビルマの前線へ投入され、まもなく日本軍との交戦を経験するに至った。さらに、一部の部隊は終戦後もビルマに留め置かれ、日本兵抑留者キャンプの監視業務にも従事させられた。高温多湿で急峻な山岳地帯から湿地帯に至る過酷な環境にイギリス人兵士が苦戦するなか、熱帯地域への対応力を有したアフリカ人兵士の存在は連合軍の作戦実行上極めて重要な存在とされた。

しかし、申請者による一連の調査のなかで、インド=ビルマ戦線に投入されたアフリカ人兵士についての日本人による記録・記憶に基づく研究は、土井の研究[土井茂則「日本・東アフリカ関係史の一考察」『アフリカ研究』第 21 号(1982 年)]を除くと皆無に等しく、アフリカ人兵士による日本軍兵士についての記録・記憶も、T.ステイプルトンの *African Police and Soldiers in Colonial Zimbabwe* (University of Rochester Press, 2011)によるローデシア(現ジンバブウェ)のアフリカ人部隊による戦地記録の分析を除くと、従来の研究では断片的にしか取り上げられていないことが明らかになった[本申請書 6 頁の口頭発表 3]。

第二次大戦期の日本アフリカ関係史において最も不幸な出来事であったとも言えるインド=ビルマ戦線での直接の交戦の実態を解明するには、日本とアフリカ双方の戦争体験者の記録・記憶を包括的に収集し、その内容を相互に参照させながら慎重に分析することが必要であることは言うまでもない。日誌や回想録、関係者たちからの聞き取り調査を通して、インド=ビルマ戦線を経験した人々の記録・記憶を収集し、整理・分析をおこなうことを目指す本研究は、その要請に応えるべく計画されたものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、第二次大戦期のインド=ビルマ戦線において直接交戦せざるを得なくなった日本軍兵士とアフリカ人兵士およびその戦闘に関係した(もしくは巻き込まれた)人々の記録・記憶の分析・検討を通して、戦場における彼らの経験の態様を解明することにある。

３．研究の方法

インパール作戦後にビルマ戦線に投入された東アフリカ部隊(第 11 東アフリカ師団および第 22、28 東アフリカ旅団)に関しては上述の土井による研究によって一部明らかにされているため、本研究はインパール作戦直前から作戦中盤にかけての時期にビルマ西部で日本兵と交戦した西アフリカ部隊(第 81 及び 82 西アフリカ師団)の事例に調査・研究の焦点を当てる。

そのための具体的な調査活動は次の 3 点に集約される：

(1) 国内の図書館・資料館における、インパール作戦以降にビルマ戦線に従軍した日本軍第 15、28、33 軍関連の元将校・従軍兵士・従軍記者等による日誌、手記、回想録類に表出する日本兵とアフリカ兵との交戦に関する情報の収集

(2) これまでの報告者による一連の調査で未実施であった旧イギリス領北ローデシア(現ザンビア)におけるアフリカ兵関連施設の視察・背景調査

(3) 英国図書館新聞資料室におけるアフリカ兵およびアフリカ兵と日本兵との交戦に関する情報の収集

４．研究成果

本研究期間前半の 2021 年度および 2022 年度は COVID-19 の影響、さらに、2023 年度は急激な円安と物価高により、海外における調査の実施が大幅に制約されることとなった。その状況をうけ、特に前半においては、上記 3.(1)の国内での調査を集中的に実施した。特に、これまでの先行研究がほぼ対象としてこなかった、日本各地の図書館に「郷土資料」として所蔵されている第二次世界大戦経験者による戦争回顧録・回想録の調査に重点を当てた。これらの資料は主に自費出版等の形態で出版されてきたもので、国立国会図書館にも所蔵されていないものも多く含まれる。

本研究期間中に調査を実施することができた都道府県は、栃木、茨城、静岡、滋賀、京都、福岡、佐賀、長崎であり、それぞれの調査においてビルマ戦線従軍者による回想録・回顧録の存在を確認することができた。参照したのべ 100 点以上の資料のいずれにおいても戦場における生々しい記述および記録者の戦争に対する複雑な心境、さらに、旧日本軍の各部隊間の(一部歪な)関係性についても記載されており、本研究が対象とするビルマ戦線の実態を知る上で極めて貴重

な資料である。そのなかでもアフリカ兵に関する記述が確認されたものとしては以下を挙げることができる：

- [茨城県立図書館所蔵] 島田操『祖父から孫に伝える太平洋戦争：ビルマ(ミャンマー)での戦い』生涯学習研究社、平成 11 年（著者は大正 11 年、茨城県西茨城郡生まれ。昭和 18 年 7 月に弓(第三十三師団)に転属し、昭和 19 年 3 月からインパール作戦、イラワジ会戦に参加。昭和 20 年 8 月、タイで抑留生活。昭和 21 年 5 月、陸軍衛生伍長、復員、石岡駅に復職。本書 223-225 頁に「東方のカボウ谷地(東にミンタミ山系、西はアラカン山系に挟まれた谷地)方面」で「カレミョウを目標に南進撃」を続ける「第十一東阿師団」についての言及が確認された。さらに「狼・第四十九師団(朝鮮で編成)」についても言及があり、「ビルマに対する最後の増援師団として入緬したのは七～十二月であった」「この師団は、その兵員中約二〇パーセントが朝鮮人現役兵を含んでいた」と記述されている。）
- [福岡市総合図書館所蔵] 吉塚鉄蔵『狼兵団通信隊ビルマ戦線回想記』吉塚鉄蔵、1994 年、216 頁。(所蔵は同館のみ。「黒人兵」および「WA81(=西アフリカ第 81 師団)」の兵士に関する言及あり。）

上記 3.(2)に関しては、2023 年 10 月に実施が実現した東南部アフリカでの調査において、ザンビア北部に存在する「戦争記念碑」に関する現地視察をおこなった。首都ルサカよりンドラ経由で北部コッパーベルト州の州都キトゥウェを訪問し、記念碑の存在(所在地)を確認した上で、下記の碑文を記録することができた：

[写真] キトゥウェの世界大戦記念碑(2023 年 10 月報告者撮影)

また、碑の側面には 1933 年に設立された北ローデシア連隊(The Northern Rhodesia Regiment)の軍章が刻印されていることも確認できた。同連隊は北ローデシア警察隊(The Northern Rhodesia Police Force)を起源として 1933 年に設立されたイギリス人とアフリカ人の混成部隊である。

さらに、上記 3.(3)のイギリスにおける調査も 2022 年 12 月に実施することができ、英国図書館本館新聞資料室において、1940 年代のガーナで発行されていた新聞 4 紙(The Ashanti Pioneer [Kumasi]・The Spectator Daily [Accra]・The African Morning Post [Accra]・The Gold Coast Independent [Accra])の詳細な内容確認を通して、第二次世界大戦期におけるアフリカ人兵士に関連する記事を収集した。加えて、ロンドン市内古書店において、第二次世界大戦期においてイギリス軍に従軍したアフリカ人兵士についての記述がある政府発行のパンフレット *(The Abyssinian Campaigns: The Official Story of the Conquest of Italian East Africa*, London: His Majesty's Stationary Office, 1942.)の存在を確認し、私費にて購入した。本史料は、第二次世界大戦期の北東アフリカ戦線における英軍側の組織およびアフリカ人兵士の関与を詳細に記述するものであるが、第二次世界大戦期のアフリカ人兵士の動員状況を示す情報も多数記載されていることから、本研究にとって極めて重要な情報を入手することができたと言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 クリスチャン・チュクマ・オパタ，エイペックス・アンセルム・アペー，(溝辺泰雄 訳)	４．巻 16(2)
２．論文標題 [翻訳] 第二次世界大戦によって変容した植民地期ナイジェリア・イボ人社会における日本のイメージ	５．発行年 2024年
３．雑誌名 明治大学国際日本学研究	６．最初と最後の頁 123-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 溝辺泰雄	４．巻 100
２．論文標題 日本のアフリカ史研究のいまとこれから	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アフリカ研究	６．最初と最後の頁 79-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 MIZOBE, Yasu'o
２．発表標題 Navigating Economic Frontiers A Historical Analysis of the Yokohama Specie Bank's Role in Japan's African Expansion Strategy in Africa (1930s)
３．学会等名 Research Forum on Japanese Industry and Development in Africa (Stellenbosch University Japan Centre)（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計4件

１．著者名 遠藤貢、阪本拓人	４．発行年 2022年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 272
３．書名 ようこそアフリカ世界へ	

1．著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、冨谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 316
3．書名 アフリカ諸地域 ～20世紀	

1．著者名 溝辺泰雄	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 378
3．書名 論点・東洋史学（「アフリカ人としての民族意識：いかにして形成されたのか」執筆）	

1．著者名 溝辺泰雄	4．発行年 2024年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 308
3．書名 20世紀の社会と文化：地続きの過去を知る（[第6章]「植民地主義：独立後のアフリカが主導した核兵器廃絶運動」執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関